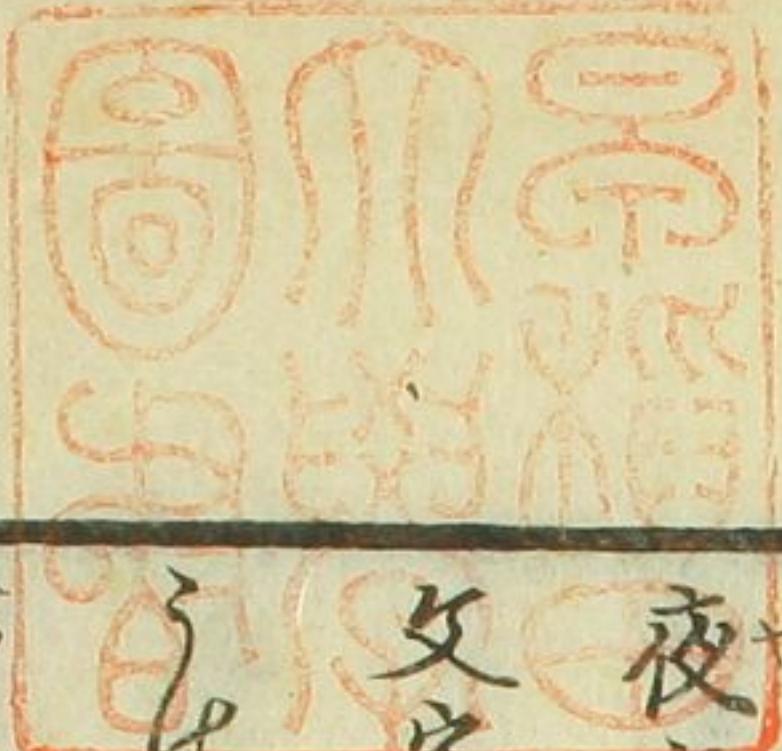




石上私淑言下巻

本居宣長

あくへ又問りてやまととの傳承といひてへいき まろ差  
夜麻<sup>トウタ</sup>登于多とひかくを傳承すやべ傳承とかまゆ知事を據すも  
文家よつまくひびきを言ふ 回云ちくびまづ傳承といひて  
うけむじ 善云傳承といひ名前を多くいふまかく  
古事記日本紀ふへまをぞもき教とのをあき傳承といひと  
もうとせき書籍とぞもく学ぶせよあくと詩とも傳承といひスの  
國やのうとつまうもあきべうもれまがくつきようとけ方  
のとば傳承といひとぞもまよとく二のまよー一つふへり



國のをと齊歌楚歎などもうちてひきよかして傳  
詠とかく三つあるもとよりの歎詠は對してひきよかして傳  
やまく仰まかれてりすがほもばほのまきまびづれ  
ゆとあれほどすかることねぐらむとまくまくよ二事を  
あづきこそ傳歌とひすれ候くわよまくまくハ万葉集第五  
よ書歎饅酒日倭歌四首天平二年又第二十ニ先太上天皇詔陪從王臣  
曰夫諸王卿等宜下賦和歌而奏上云云とぞほゆ日本後紀より  
と代々の國史よりある漢文よつけむわゆく多くうされハまし  
あまぐれ修字文やうそもかくまどとき岩国あまくどもつむれく  
ゆふむね経文などもまたもとぞ漢文よての歎のよりとぞ

ひすまやくあぐらをかくじきことこのねよ万葉集ハ絶筆ハとあ漢  
文をとどともせ被とのまうけを傳へうとうけもへちよむくニつのまうけ  
うとむすみ卷あまそものゆよゆをどよせむとくもゆゑよよりてかく  
まもるび一才せ卷あまそ詔命の羽をばりえひよまぎくとすと  
ぬづきをもみか傳承とうけことれ又とくよ和歌とあはねの  
集よむ一とくよわせて差をすの和額とうすにあひてうけ  
れ字をよくやまとかうのよあいだ又今之印本の和歌よ萬葉和歌集  
とうけよむをもみのまうにうけよむあきばりよもいだ和歌  
集とよ歌号へをうよあいだを延喜の勅撰集と古今和  
ち集とあづけ真字序よ夫和歌者とうきよし紀氏の新撰の序よ

和モトリヤニシハキのヨリモリノ事モ和モトリヤニシハキの  
アレカサガシテリナ所モ必和歌トリアガハズクのアシヒニアモト  
リハシムシノミツキアヌヤア 因云傳歌トガニ事ヘシケ経有  
シテモトコロヘハシム 美云夜麻登チ多トリハモニテ有  
ビ傳歌トシテ文字ニツキテリハシセモ言ニシギノ頃ヨモシタスルビ  
トシヒト文字ヨツモシテリハシセモ頃トモシタスルバ宗廟セ久ル伊弊  
ヒノマヤウカサ トモ能麻宇須都伽佐トシムシトシバ  
文字ヨツモシテリハシセモ頃夜麻登于多モヒトジヒニシル  
ツモシトシモシトシモシトシモシトシモシトシモシトシモシト  
傳歌トシモシトシモシトシモシトシモシトシモシトシモシトシモシト

まざまな事あつたが夜麻登子多とひづりもあつて  
あれどもあざく傳承とひづりも文字のまゝにやまとさへ  
よがまもあるほくあわくりのを云ひゆうとせよんが  
今あづむざと必あくとやくあづまきのまづりとくまも  
あまくと信説よまくびくべ夜麻登子多とひづりはくわよ  
えをくる伊勢物語よかわくねむじうよもせで酒とのを飲てやまと  
うよ、うよわくらふをあまくわくあづぐ一月ハ酒をどすむ作づく  
きうやうやうがよまくとがくとひづる又源氏物語あまくわくと  
つづく澤を時あくうのよやまとのよかくつづり又源氏物語あまくわくと

總角卷云  
つらりとまくらを  
のせりろきを  
うちを一やまと  
くもことよつけ  
てあわれと云ふ  
椎本卷云  
かのじやまくら

云々 うはわせめ  
魚君を云 よぢひよと  
やまとひあき ひあかづこ  
むすめのすり 云々 写丁

云々  
うはわせあ  
魚君を云  
よぢひかと乃  
やまとちあき  
久あつて一  
むすめのより  
云々、四丁

もこゝのをぬきこしはまくらのまことのよちあくまよ  
も根かどつきあへてあさとべも千多とのもあまほきを  
あつよ後世よ見と釋まとて夜麻登とすよもくの義を  
つけてもくじかねまひそれかくもろうかくと夜麻  
登へうつてきる言よあじたで傳承とりとせゆゑ  
ま文字よつきてひかへせる言あくを字をあじても屬字へ  
たぐのまれ被りよまくも料みてけ方のようとりとせのま  
まとも廣さにまくもまくもあきとめくもあきと  
とゆあく夜麻登于多とりとゆとりとくとくあ  
りすく大あくしぐまくわくあまハ夷曲とゆすのやまに對しとくま華

のうと大和終とひきどりとまわる後を又大和  
終と、さきもうちたまにやつてごとくもあわせとばかとりてもひ  
くるかどりゆくと倫ぢまをあゆみと夜麻登へもむか  
國の名あくふうにあづま半にあゆみと思ふべ  
りよを半あくの後ありふりくづけぬるを  
へふりにあづま半をあゆみとばかくりくづけぬくと  
やあやうとひきどりとひかれまよせやうのと  
とすとへまづ論ぢまよにあひてあくの後あくはんを  
まよすとがくとまよくせよまづ夜麻登へもむ一  
の名あく前もよたれのまよとお武天皇をト

ひ國の櫛原宮は天の下あく一りてより世の皇孫の名ひは  
の内あとバ帝都の山川の名をなほゆるありづま下の地  
名をとあると  
回云やまとその名をいつより始りとども或段よ  
坂よをりあづらとりからいき 義云あくべ夜麻登といふすへ  
八千矛神の山うやをとえ又鏡速日命の天階を経て而よ虚空  
見日本國と不在と云て神代よりれを神武天皇の山号へ  
ひまの名よとくゆよせと神代紀よ狹野尊亦號神日本  
磐余彦尊所稱狹野者是年少時之號也後授平天下尊有  
八洲故復加號曰神日本磐余彦尊とあるひ又とげひあると

姫の御子よあくざむ院やあくねー本紀やもももももももも  
さり又磐余の和の山川の名をばい山号をいとく國の名を  
あくさきりやまくげ 回云現後よやまとへもとくわくとく  
其名をと神武天皇以後至那の山川別名をあくとくとく  
いき 義云大あくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ゆめとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

九重の氣をもつてあり又陰奥をもくらむ者と連らむれば  
母とひの歌の名ととぞ多く一ふの氣をとくに  
多め列名すありおこりてゆよぢ名あらきとくの例と引を  
とあく夜麻登ハ神代のある言もた一國の名のそひて神武  
天皇と山はまぐの想をよづるハウミテ  
曰云神武天皇紀より  
皇輿巡幸因登腋上嘸間丘而廻望國狀曰妍哉乎國之麗矣雖  
内木綿之真迄國猶如蜻蛉之鱗咲焉由是始有秋津洲之號  
也昔伊弉諾尊目此國曰日本者浦安國細戈千足國磯輪上  
秀真國云ことあよ日か老とぞ多くあほの底名呼アトヒ慈  
名とゆきをわいひと 美云こととく一ふのまゝ廻望國狀とひ

あそひあそび天下の廣大き形狀へつぞう一國よもやまく又内木  
綿之真近國とのまゝむちうに一國のすと寧まり真近國  
ハ真狹國<sup>マサキクニ</sup>ニ是ヌトソトソトソトソトソトソトソトソト  
トモミカ一主のまゝソ終ニ新日本紀アヨヨシモトモセシホー  
テ近ノムハナヨアシヌリソタ和室ハ浦安レ浦安ヒハリソウ  
ラビト新アソビヅルレズハラシアキシグゼラシモビトアギ  
ノシシキ浦ハ傍室モモトヨシナ夜麻登ゲ想尼ヨアシトモモ  
ナ秋津洲<sup>シシマ</sup>モヤシモヤシモナヨアシヘハのまゝ  
廻生<sup>スイシ</sup>大日本豊秋津洲<sup>シシマ</sup>ハ筑紫四國カシミのモアモ  
モハのまゝモハ行也名トナシモナヒモ<sup>シシマ</sup>大ハ洲ヤ

神代紀上よ三韓  
とくじいも韓鄉  
朝鮮

りかとその大小に、つゝば海とてあるふと一洲うそこの般  
ハつとハつと古事記やへ淡道之穗之狹別鳴伊豫之二名鳴隱岐之  
三子鳴筑紫鳴伊伎鳴津鳴佐度鳴大倭豐秋津鳴也日本紀日本書同

紀より大日本豊秋津洲伊豫二名洲筑紫洲隱岐洲佐度洲越洲  
翁大洲吉備子洲もとこのゆれやまもとへ七洲とのぞきて邊界の  
つまき國を一つよどびりとば姓其名をもととぞれへ其名  
やもありてはのせありつことあく神代の名をもとへあくに  
引神武天皇紀より始有秋津洲之号也とあるもくわちべー神代  
よりひもとて天の下に姓名ハ葦原中國大八洲國をもとこのうち  
神代の名をもとへいふとすとよりいふとすとへ葦原中つ國

とひひひかくいふはへ大八洲國とひそくやまく姓名よりうりへ  
えだほのまく 同云やあくが生葦原中國と生大八洲國と  
書つてゐるが二紀とて大やまとへあやまくも 云云葦原中  
國ハもとより天下の姓名をもとへ草原中から來の七洲の名をもと  
もとを除きてつぶさかとば草原中から來の大八洲ふとおおざと  
夜麻登へりと一の名をもとへ草原中から來の七洲の名をもと  
いふ七洲を除きての姓名をもとへ草原中から來の大八洲ふとおおざと  
名あるとて國の姓名をもとへ草原中から來の七洲の名をもと  
ありまぐー 同云ひと一の名あるとへますをもとへ草原中  
いつの名もありあまくさや 云云とひうとひうとひうとひ  
ひうの名もありあまくさや 云云とひうとひうとひうとひ



君齋云師硯の  
中やも國号考は  
山秀とつるる  
うわー其のハ  
うよむかわく  
古書ともよむ  
かあす於諸國  
名義考より

かくことかこをかづくをのむをすりかわくをとくべ  
度の玉号の例も夜麻登のあらすゑをとめづく  
あらすゑもと  
聞やまくりふ名のとへき　蓋云ひまつま  
ゆくはあきどもあくまぬこと　うわくつづく　ゆくひあくよ  
山處のとあくべりそりよ神武天皇紀の天皇の活言も聞於鹽  
土老翁曰東有美地青山四周云々れ大和のより古事記倭建  
命の御哥子夜麻登波久能麻本呂波多々那豆久阿袁加岐夜  
麻碁母礼流夜麻登志宇流波斯<sup>タナリソク</sup>も與ひあくべりそ  
くハ疊附又神武天皇紀よ大己貴命代玉牆内國と目け流ると

あるもまよ山<sup>ヤマヨ</sup>山<sup>ヤマヨ</sup>の名<sup>ナミ</sup>又左半記仁德天皇の皇后石立  
日賣命の御<sup>ヲ</sup>袁陀<sup>アタヤ</sup>夜麻<sup>ヤマ</sup>夜麻<sup>ヤマ</sup>登<sup>ト</sup>されも指<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>くやくよ山  
のあぐ<sup>アグ</sup>と<sup>シ</sup>く又神武天皇の内木綿真近國との<sup>シマツモ</sup>万葉  
第九菟原處女墓の<sup>ウツブノ</sup>虚木綿<sup>ウツブノ</sup>乃牢<sup>コモリ</sup>而とづけ<sup>シテ</sup>と合せ<sup>シ</sup>  
ミズ<sup>ミズ</sup>をの左を<sup>シテ</sup>おもひのやぐ<sup>ヤグ</sup>るや<sup>シテ</sup>ある<sup>シテ</sup>ある<sup>シテ</sup>とづれ  
夜麻登<sup>ト</sup>の<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>山處<sup>アシキ</sup>の<sup>シテ</sup>大<sup>シテ</sup>ゆく<sup>シテ</sup>ある<sup>シテ</sup>とづれ  
と山脊<sup>ヤマヨ</sup>といふ<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>山處<sup>アシキ</sup>の<sup>シテ</sup>大<sup>シテ</sup>ゆく<sup>シテ</sup>ある<sup>シテ</sup>とづれ  
と<sup>シテ</sup>一つ<sup>シテ</sup>山處<sup>アシキ</sup>の<sup>シテ</sup>登<sup>ト</sup>り<sup>シテ</sup>例<sup>ハ</sup>立所<sup>ハシド</sup>伏所<sup>ハラヒド</sup>被所<sup>ハシド</sup>と  
登<sup>ハシド</sup>山處<sup>アシキ</sup>の<sup>シテ</sup>夜麻登<sup>ト</sup>の<sup>シテ</sup>登<sup>ハシド</sup>と<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>

一說文より處字を止也と註し玉篇より處字を居也と註し云彼是  
彦膺呂云鉤を知  
ありせりく考ノ一一つある夜麻都登許呂のつまりくと都登セ  
トアヒ同格  
がむとバ登也登許をカウムの登呂をカウムを登とアヒバ都登  
コロ  
許呂の口言ハ登の一言までまうそ夜麻登とハアミクノリモ義乃  
義とカウムカウム  
曰云私記云天地剖判泥湿未乾是以  
柵山往来因多蹊跡故曰山跡山謂之耶麻跡謂之止又古語謂  
仁止言止往於山也とアヒイヒ  
善云止とハモモトテ天下  
の熱名とアヒテアヒハ湯也やまもいゆと一圓の名であるナ

あよりが爲し一旦とひりもとより想名あらわせよじ候うけ  
ごく一毛収ひまづ是ハ山跡と山止とニ義よつちよ泥湿未乾  
栖山や急の事とまよ申ゆれど神代紀よ古國稚地稚也いふ  
事へあきどそれハ二神すわもあのみやくんわいまよひもひだ  
らきり以前ハくろ住处うるす周易  
キトヨスツ  
八洲玉さきまど生年ぬゆの事あきとば栖山あざつてうへひゆづきそ  
かよ泥湿のつうぢ一毛もひよたてまつもあよえとえくま  
かく又まう年もぐくもやとまかあをときて又一毛の別名とて  
又とばくわくぬりと契沖師の和州よつぎうて泥湿のふ  
うきとづきよあねべとくびとつまれてひまうすとあきとば  
稚山の義と見ひて和州ハ西面をあらわとば津糸のたよひ

ヨリベーとひ万葉よりちやく山跡と云ふ事より卷より題字に  
ヨリモツセトモバヒ餘材抄あるもされど手ハトシビモ取ら  
往來の跡よりゆれさればとくほの名よりくもゆがえり栖山乃  
宿と用るとかく行ともりベー栖山の義と用ひざるハ跡也  
義はこれぬこと大方泥湿未乾插山多蹤跡とひよ宿とゆく  
山跡とせあく文字よりしてゆきとまアムベー跡字に  
つきて往來の跡と思ひよりこそよちひとひよ宿とゆく  
いともと泥湿未乾とひよと設りてるアムベー冲師公れ  
とヨリベーとアムベー行の跡と云ふよあづまとより万葉より  
と西字のヨリヨ内出よと用ひうとくもへたくもアムベーとる也

モソ行部よあらぬかくすぞとひよかと傍字をせぐくをハ字  
義ヨリカバ行部を拂くかく半地や一跡ハ阿登あれを阿登  
言の中に押出と肩く例めやく日上の麻ノ阿の韵あれバシク  
山行と云ひてかくさとよつ代の文あれつひゆうまれ取つか  
らゼーのモ義と云ふわべを近代を尊られば第と用  
ひて山行の意と一を今序又ハ懐紙をと披拂せらるをやまつ  
そひあすにゆむとあくひとをう事ありそれや一ゆみひの行  
夜麻阿登とひよりひよくにゆまだるく(ようきゆく)いもむや  
モ義あくわくぬをやまく今の代のとくをとひよおふひはま

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
所ナリト年アモニ言ミシテアヨリヒト人の年セハラウ  
セラウアム人セモドツキミソト今山處のミトモルツツキテ山止  
の義ハ色ガレ止住於山の役ハトクダムのやく見る中にある  
事トイタ事ヨトモト  
曰云ムカム戸キムの役ハ  
山外ハアヨリ左役タの役モシヨモクダムナゲトースム戸  
大八洲セ生ジテ大日本セモチドウモミシキハ洲のウツツ國  
トリヤマムハ洲<sup>ヤシマモト</sup>元の墨<sup>ト</sup>ヒトヘイヒ  
差云ヨウ一モトニ  
理アタシム名ハ左云のミヌモタグナリム役ハアムノ  
アムモジト左のミヌ近ヘハ洲のミヌモ半代ニ程モキモ左名ヅル  
ヤウのミヌハ世學同源流のミヌモキモクモナシケドモナシ  
役モハ世学モミムハ洲代の名義アムバミムハ洲  
の半代モハ半代モ左半代アムナシケドモナシケドモナシ  
ミヌモハアムアムナシケドモナシケドモナシケドモナシケドモ  
テ洲セ多キ日半紀セトムヤハク神代の左云モキモハ  
モモアムソレハ  
曰云餘材抄<sup>ハナホ</sup>ヨ軒名ヨ山産也產生物  
也トリモト引<sup>ト</sup>ミホ号アムナシトの想名ヨ利ヒラミトナシハ  
いき  
善云ムハムナシモト想名ヨアムナシハナシヨリモセクニ德  
天皇ヨウムアムアムト代ヨモキモハナシモトナシモトナシモト

○私淑言下  
十二

アムモジト左のミヌ近ヘハ洲のミヌモ半代ニ程モキモ左名ヅル  
ヤウのミヌハ世學同源流のミヌモキモクモナシケドモナシ  
役モハ世学モミムハ洲代の名義アムバミムハ洲  
の半代モハ半代モ左半代アムナシケドモナシケドモナシ  
ミヌモハアムアムナシケドモナシケドモナシケドモナシケドモ  
テ洲セ多キ日半紀セトムヤハク神代の左云モキモハ  
モモアムソレハ  
曰云餘材抄<sup>ハナホ</sup>ヨ軒名ヨ山産也產生物  
也トリモト引<sup>ト</sup>ミホ号アムナシトの想名ヨ利ヒラミトナシハ  
いき  
善云ムハムナシモト想名ヨアムナシハナシヨリモセクニ德  
天皇ヨウムアムアムト代ヨモキモハナシモトナシモトナシモト

氏部式云凡諸國  
部内郡里等名並  
用享必取嘉名

あそ半ノ和銅の詔は着好字とある延喜の式又取嘉名と云ふ  
ことかくはまかゆ世を定め沙汰よりての事アレバ古代の事わざのづ  
クシテモシモモ文字とよきよもよとあれうびもきる  
名を改めよとあらわべ夜麻登す文字の沙汰ハモトケド言  
つまく嘉号醜名の沙汰ハ用あそ半ノ  
曰云やまくもよ偽字  
とくく半ノ  
善云倭字ハキムツケル名ノ始  
事よもえの前漢書地理志ニ東夷天性柔順異於三方之外  
故孔子悼道不行設浮<sup>ヲ</sup>於海欲居九夷有<sup>立</sup><sub>カナ</sub>也夫樂浪海中有倭人  
分為百餘國<sup>モテ</sup>歲時來獻見云とあ是之名はの云どもやまく  
きりひきあ々羅<sup>ヲ</sup>と倭とのことアソセガくかづけ<sup>ム</sup>トハゆ

あそた又モ半ノ字アソトモソ思フニ倭字の半義ハ說文半ノ  
順貌と詳<sup>メ</sup>と右の漢書の文を引合せ考フニ東夷天性柔  
順アリ故ニ倭人トリモウカ班固ハうけもうるをもがつ  
矣曰和奴國耶<sup>云</sup>和奴猶言吾也自後謂之和奴國也とあるト元々  
集<sup>ス</sup>載<sup>ス</sup>モど是又信<sup>マケ</sup>又一說<sup>ス</sup>は倭奴國を唐もよ<sup>ス</sup>六  
於能許<sup>モ</sup>そ<sup>オノ</sup>磤<sup>ゴロ</sup>駄<sup>シヤ</sup>盧<sup>ル</sup>鳴<sup>ミ</sup>トリモトリモトナヨ<sup>ケ</sup>レゼ附會<sup>ス</sup>  
唐書<sup>ス</sup>倭<sup>ス</sup>國<sup>ハ</sup>倭<sup>ス</sup>國<sup>ハ</sup>極<sup>ス</sup>南<sup>ス</sup>界<sup>也</sup>と<sup>ア</sup>唐書<sup>ス</sup>倭<sup>ス</sup>國<sup>ハ</sup>倭<sup>ス</sup>國<sup>ハ</sup>と<sup>ア</sup>ヒトモトナヨ<sup>ケ</sup>ル  
詩國の半号<sup>ス</sup>アソトモソ思フニ仁德天皇の大度歟  
の數よそりば人の代<sup>ス</sup>アソトモソ名號<sup>ス</sup>アソトモソ仁德天皇の大度歟

魏志耶馬墓  
と云隋書北史  
あさよ邪摩堆  
と云ハ即夜麻  
登と云名を度て  
えきもの

少もよき私祀あり今見在淡路嶋西南角小嶋是也と云  
代うそに秋津の名よりこそかくまつてもわよみせされバハ洲  
夜麻登をもつとをすりくまきの文字をもて名づけむハシモ  
えきねれどひ方の人乃と夜うそにいとぬ名を御命の人乃とも  
えきよあくべば泥をひらきくまつてさとバ僧とあづけもやなハシモ  
えきくぬるあり　同云僧を夜麻登とよむすハひで　善云  
えきこーの書どもよ僧とあるをもてやがてもまをひ方の鄰の夜  
麻登よりくしけとそとをもハ仰きの所トの半がと経ぬるよ  
立のゆりと云々古事記やとやまやとひあをまかはまを用ひ  
えきくうりとあるをもちまくまづくは祀ハ直隣とむねとてうけ  
えきくそとをも唐うそあづけとおと想名あきとて西方かくハ想名の  
やまやと列名のやまとある用ひ　同云僧を和ともかくハひで  
善云本末傳字を用ひ來りとぞとをもあふう名づけたる字  
多く僕奴かどよりひて美名よあくべとそやほよけ方かく和字に  
改められと故よ唐の字ハほ世をも和字を用ひてうみハミを改  
多く和字も玉號よもよへとある字をと多もよあく僧と同も老  
姓字あるを取らざるまでの半かべとそも上左ハシ夜麻登と

了がよゝそくをとあるをぬ文字づひのあから必注を加へく天之常  
立神とあると訓常云登許訓立云多知とそりて御うるよ僧とくそ  
云夜麻登と這せばせよあるねくまされとすチあくべにそく序よ  
とくそとくそと唐うそあづけとおと想名あきとて西方かくハ想名の  
やまやと列名のやまとある用ひ　同云僧を和ともかくハひで  
善云本末傳字を用ひ來りとぞとをもあふう名づけたる字  
多く僕奴かどよりひて美名よあくべとそやほよけ方かく和字に  
改められと故よ唐の字ハほ世をも和字を用ひてうみハミを改  
多く和字も玉號よもよへとある字をと多もよあく僧と同も老  
姓字あるを取らざるまでの半かべとそも上左ハシ夜麻登と

之言をむひとく文字へ傍ねあひとばきゆ波を及ちてあらずより  
せんく傍字を用ひあるよほすと文字の好惡を擇ことよがりく  
和字ふと改めらるどもせんくは和字の義よつて大きよやうぐれ  
君臣の風儀へどりへ又はの附會の徳と文字へ傍ねことりよ  
半をあくぬかよく従ハツでうそあざーあよ門漢書の文又順貌  
といふをやすと和順かどもべくと思ひ合せば和と傍せらるお邊  
をとも取もるうとものれどこれも行はの如ひやうま事あざー又繼體  
天皇紀の詔よ日本邕々名禮天下秋津赫々譽重王畿ヤマトヤハラギテ  
とある邕々離と通して詩経大雅よ離々といひ役よ鳳凰鳴之和也とも  
あり又聖德太子十七條憲法の首よ以和為貴とあり又もろこすあく

雍州ハモモ帝都の國乃名之放よけ方をもむね世これなあひて  
山城を雍州ととづひ雍字も和也と往あり離とをもむなと大  
きよこりてくもか和字ふすとあきバヘづきよもあき義ととくも  
半をあくうとせりとねきとまでもあきまじきとまくほは老をバ  
サのづくはくうくもくへねほくあきあき又子華子よ太和之國といふ  
半もあきとこもくわくうもつねすと 因爲和字よ改めりと  
行きのよせせりとぞ 言ふさざる記せしとあくとあく考ふ小  
古事記へさくわをつむべ日本紀をも和字を用ひた事つむべ見  
え度茅五卷よも一つあきと決してはるの邊とを放ハモモ院  
和字を用ひた事あくべ必きをかまづきよあまと紀书中に數む

あらば堪能き夜麻登よりか日本倭とのこととさればこの世  
やをも見てもかく放よもとる一湯主のわく續日本紀よりあり  
て姫くに字ふえられ改られましハだされどうてねじ紀  
のやうと考るは首ハ倭字をのこしとく元明天皇和銅六年五月  
甲子詔ニ畿内七道諸國郡鄉名著好字とあるを以て改め  
らるをとみるくまほのむ倭字をこそ聖武天皇天平九年十二月  
丙寅改大倭國為大養德國同十九年三月辛卯改大養德國依  
舊為大倭國とあらばおほむ倭字あるをもとくとす  
孝謙天皇天平勝寶四年十一月己巳の文ニ以て四位上藤原朝臣  
永手為大倭守とあるまでもと倭字あくまほ天平寛字ニ

二月己巳の勅ヨ大和國と姫くに字をも協々と承和字と書き  
あうれどもとハ舊室に年十一月己亥字ニモ二月と乃  
弓子改りされ候事とむ行ひ多く和字をちぢせまふあらば姫  
養徳の例をさへ和字も必絶今かくあつた改めらるゝな承  
てきと紀やとあら一済せきと類聚國史やとやうと改めらるゝな承  
天平勝寶年中よ改まつて一わらハ接あらるるかと大倭  
宿称とおれハ和字も改まつてのとくよもとづきとすと宝字元年  
六月の文ともお傳字とちく同年十二月の文よ姫く大和宿称と  
是とまきハ家字え年六月うちと前をのるよ改まつてのとくよえ

あれど又万葉集を考るに才十八卷までハモリと綱すの傍字を失ひ  
さへ事多一才十九卷天平勝宝四年十一月廿日新嘗會肆宴應  
詔歌六首の中より左こそ大和國守藤原永手朝臣とあること和字を失  
ひて始く才せむよ先太上天皇詔陪從王臣曰夫諸王卿等宣賦和  
歌而奏云右天平勝宝五年五月云始く和歌も失うる藤原永手  
朝臣とた傍字とある才十一月己巳の日は事あくあること己ハ若  
母と考る二見とよ後傍字をつけるよろよ和字とつけさせど  
は月の内よ改らるゝ事すれどこればのやうとお送せらるゝ  
を第一方筆ハア文字よもじひて波音よちゆめのうよ始く和字よ  
かくへまうまあるきやゆゆよ出でるこゑのうべー又あだ二つのもな

とハ傳写の得りをつうべーことよ大和筆とわうむほのせふへ考よ  
うとあれどよあきべ傍字をあくタびとすとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
ぞと又二月うけみ日とのうよつうとあまう傍字と是をあくされば  
うとこれ方筆あくへまうべー又紀ハ傍字のわざへれ傍と云和  
字と云は始くへまうべー又和とあきべ書體と云うの統ひへあきべの  
文字へいよまうせきへまうべー又和とあきべ程度と云は別は改られると  
あくねばこゑへあきべきよあく姓必指のまうあきべれば大和和称  
とづくううあよ玉名へ改まうくまうとくがくとくとくとくとくとく  
十一月うう寫字え年十二月までの内とへゆるよとあくれうく

式令詔書云明  
神御宇日本天皇  
詔旨義解云謂  
美事宣於蕃國  
使之辭也明神  
御宇大八洲天皇  
詔旨義解云謂  
用於朝廷大事  
之辭云云

宮の湯ノミナリハ多モアリケラスが如一和洞の和ハ夜麻登乃ミヌ  
あくねバ別の事ニ又万葉抄み才ナムの因縁アリ和字ニシケルアリレ  
因縁アリハ人足加テムアリカドバリアズミニシケテニアリ代々アリハアリ  
ル天平猪室即テアリアリタヨ和字ニシケルヘボアリモアリアリ  
同云日本トアリキハアリ  
昔云若御國の和號ハ大八洲天皇ハ和字ニシケル  
ミヌ一あくニシケルアリモアリハの号ニシケルアリ詔命アリヌアリハ  
大八洲天皇トアリキニシケルアリモアリ日本天皇とハヤセニ合カレ  
ビササギノミナリシケルアリモアリ號ハ和字の山高ニシケルアリモアリ  
小紀セシモアリハアリモアリ日本紀ト考ムアリモアリ極天皇紀トアリ  
日本トアリハアリ修撰の時モ改カケルアリアリモアリアリノ号也

至マリホハシカ歲内アリモアリ一正の年紀文字の西漢まで天下の號也  
アリカレアリ西漢の文字をヤヒ日ナ紀トアリテ多くハ日本乃木アリ  
利ニ修字とかく字ハナリアリシテヨリアリ法也及びシテアリモアリは  
トモ一正の年紀文字必大和とのシテケルモアリのシテアリ修字也  
モア接ビテシテ續日本紀也トモナリのゆゑモアリ倭根子天皇アリ  
シテモアリモアリ世まで傳承トモナリシテモアリアリモアリ  
藝名モアリ別名モアリシテモアリ改ラシトモアリハナリモアリ  
和字セシ見テシテ  
間ニ年号に和洞アリ又續日本紀オハヨ  
ニ和字モアリ和參アリシテ又万葉抄み才ナムセシモアリ和參ト  
シケルモアリハ修室アリシテ和字アリモアリ和字ハアリ  
蓋シモアリ

あ～どひまうひまふ～もひひまを傷まぞ用ひらと～あ～

孝德天皇即位大化元年秋七月丁卯朔丙子高麗百濟新羅並遣使進調オミコトノタマシテ云巨勢德大臣詔於高麗使曰明神御宇日本天皇詔旨オミコトノタマシテ又詔於百濟使曰明神御宇日本天皇詔旨オミコトノタマシテ云アラミカニト此始く日本とノ号を建て焉アラシタマシテ此と是を同二年二月甲午朔戊申天皇幸宮東門使蘿我右大臣詔曰明神御宇日本倭根子天皇詔於集侍卿等臣連國造伴造及諸百姓云アラシタマシテ此と是をもあを詔あアラシタマシテ又日本とあるハ新よ號と號め給ふもあを放アラシタマシテ又傷字と字名くうけとぞりて日がと不号の別よ號アラシタマシテ此とあるハ日がとり字ナヒ

孝德天皇のひめよ姫孫アラシタマシテ號と號くは後世やう御子室紀アラシタマシテ此と是をもあく辛夷アラシタマシテ也と號く一うがいのく一うもくかげあまアラシタマシテ此と是をもくわくの事と引合せく號すは隋代アラシタマシテ此傳とのみひて日本とノ号ハ唐アラシタマシテよつて號くはとく唐書云日本古倭奴也アラシタマシテ云咸亨元年遣使賀平高麗後稍習夏音惡倭名更號アラシタマシテ日本使者自言國近日所出以為名このゆう始く日本とノ号を定まつて咸亨アラシタマシテハ高宗アラシタマシテが年号アラシタマシテ云年ハ天智天皇九年アラシタマシテよあくアラシタマシテさればハ使アラシタマシテ者天智天皇紀アラシタマシテは八年是歲遣小錦中河内直鯨等使於大唐アラシタマシテと有是アラシタマシテづきりあくアラシタマシテバ大化元年アラシタマシテセ四年始アラシタマシテ之のるをと往來アラシタマシテあそアラシタマシテキヘテアラシタマシテカモ

がと重きを失へぬまゝ、波は「へやうござり」あまびースまた

く咸亨元年とも見えまじやれかと、さうもゆうり  
もつづきよまきお達へあまく又三韓やまやびとあづきす

あはよ東國通鑑より倭國更號日本自言近日所出以為名とする  
を新羅の文武王十年のときもあまく唐咸亨元年よりわざと  
ぢりとへ處もすありてうけもわとえもそも取ひきもの文も

月清集  
春水天より林の  
赤みと日のかと  
いもつともこと  
文選楊子雲  
長楊賦云西厭  
月蝕東震日域

月譜集

あらへて、所を反かとすのに見ゆるをいはゞふ  
着てまち國

北史與隋書同

彦麻呂云漢書又  
東北神明之舍と  
ありて張晏註云神  
明日也とあり後  
漢書又慕義兜  
歸日出主あひつす  
やひづるに皇國を  
日本とよづきわゑ  
トトトトトトトトトト  
トトトトトトトトトトト

述は日出處天子致書日沒處天子と書くと云ふ。隋書資治通鑑より載すと推古天皇の時世の事と又存する唐書のね  
きをもむ向どまことわる事はひ方の史あらそとてほのわよつけん  
とあ彼と云ふうさればりづきよあらばちくともと一のまよひかねりと  
ごくもつづきよ遙のとわかくてまたに津よおきよさむわくねど又ことよ  
あまくもくわのとハリとひきよアラキモとまよひたときやくと  
ねあくとびととかくドーとアリヒムとアリヒムよハサクアリ  
きともよむるあくまの文乃つてきよ成云日本乃小國爲倭所并  
故冒カタ其號をあくまもあくまりさればひ方の人よりさきにあら  
被もあくやをうれひ又取經は日本ハ唐の武后がゆ

主としよりつゝく事とひどく云ひへうれ威亭元年ころ  
へた後考の傳うへとすむぢりまくまくあらまへあつへと  
文武天皇代歴世よ蘿國まぐの御子一休をさややち輪をじゆも書  
きくあらに日本といひとあらじこれ武店がゆよあればうの國  
をそむきうる日本とハルヒをだらされを傳へ傳するうべ  
因みひのとくは左後り 美みあようやくかくうをうけと  
あらがよ月のりうふのあらまく日本とよつけとくれども比能毛登  
とくの名ハアリーモニテの所よをあよそえうちるわれ一万卷た  
とくとく風がとうなぞあら川ドミハ根へのちよどまくあひてあまよ  
ううひときのほへをうかと云ふのうむむわくつまうあてまか日牟

之とアシテオ一巻よゆと性良辰イザコドエ去來子等  
早日本退大伴乃御津ミツノノ濱松待意奴良武又オ十一巻のうよ日本  
之室原乃毛桃本繁言大王物乎不成不止このわくともかくせん  
トムヘ比能毛登とよもづきあらオ三巻不そひのちくよ日本  
ノヤマトノクニ之山跡國乃云續日本後紀オ十九奥福寺法師のまかに日本  
乃野馬臺能國遠ヒモトノヤマトノクニハ日本乃倭之國波云くことくけこた  
云くもの名よつまわらあべトのやあとが即ち名のやまを  
あればうづくふ名をまゆくつづきよあべとハ呂やま  
とつもとくの松洞と松洞とまにつまく二つのをやうかへ  
夜麻登を考す見年と云ひ急よきの文字代が刊をやぐとす

君をぞうとをゆむとくとく文字よりぬがくも源日神紀  
よ姫めく夜麻登を日命とされば紀之文をさぎり字をもび  
てされうかよやまものみよかとされあ事と取るゝ神代紀  
日本此云耶麻騰ヤマト下皆效此世の人凡の事アツシあらぬ事アラヌ事アツシよハ往々  
あまそそと御やのゆうと考アタマよおわく御名アメノミコト傳アヒト史アシヒ集アシヒノシテハ  
曰アサヒ御アメニ御名アメニミコト傳アヒト史アシヒ集アシヒノシテハ  
あさあねどちくじ室アシヒえれば人の名アメニミコト傳アヒト史アシヒ集アシヒノシテハ  
とりき他アシヒのあを傳アヒトトキアシヒ神日本磐余彥天皇倭姬ヤマトヒメノミコト命アメニミコトも  
ごひ御アシヒきそそきまごー日本武尊ヤマトタケシミコトハ天子よ准アシヒ御アシヒ事アシヒノシテにんとつもく  
まとうき崩アシヒ御アシヒ事アシヒノシテかすアシヒモスのとづひ文字にんとつもく

うみをくわ

岡云をゆふの号ハかわくちやよやまとし

國キトカクハいり 義云革系中少へてまくつるを大八洲云

シテアガチム内をちがひよりすと秋津島に夜麻登ノ

ツミシテ想名あをかねとさとばらねハ日本と/or事と達ラレム

シテアガチ名をかづくとさとばらねハ日本と/or事と達ラレム

場は想名あをかづくとさとばらねハ日本と/or事と達ラレム

モニバウル仁德天皇の大典もまくとさとばらねハ日本と/or事と達

ラシケルアガチ想名あひられとさとばらねハ日本と/or事と達

ラシケル又事とさとばらねハ日本と/or事と達

ナシケルアミ(紀行)アガチ想名あひられハ日本と/or事と達

ナシケルアミ(紀行)アガチ想名あひられハ日本と/or事と達

和州を  
大倭國を  
古事記  
景行天皇乃段  
熊曾建ノ御

大字ハアシテアシテ高代の字也とやあひて大漢大唐をり

ニアシテアシテ 義云アシテ懿德天皇ハ大倭日子鉢友命孝安天

皇ハ大倭帶日子國押人命孝靈天皇ハ大倭根子日子賦斗迹

命孝元天皇ハ大倭根子日子國玖琉命とアセリ又意富夜麻登

玖琉阿礼比賣命と假字アシテアシテ名のあをハ左邊アシテアシ

アシテアシテ意富の字アシテアシテ又夜麻登のアシテアシテ意富の

言を冠せくりと初音をあまくと書をくとアシテアシテ又登與の言を

冠せくりかやく少号ハ八洲夜麻登也と意富と冠せく大八洲

大夜麻登とりひ葦原中國秋津洲やハ登與と冠せて豊葦原

中國豐秋津洲とアシテアシテ字をもと左をもアシテ左を冠

むらさきハ唐物のあらうといづくらあらひもむかばつまし又唐室  
やくもあ代の國母と大后と御子をひ方をハ高代の嫡后と大后と  
すてを年紀はあくまうこと大の言ふ事ひゆうつまよあくは姫君  
御子を日本紀から正統を廢く國母を皇大后とされう是が唐室  
あくまうかくまうかくさうどちくへゆるも唐のゆうとあくまう  
のミスカレモはのくに神代のたまきと經ゆうとあがきは  
ヨシエまたと夜麻登てふ言のをひきあくとくく國とまに  
おの多よやうあるとまきとちくへゆるも唐のゆうとくま  
いとすむへもあくとあれどまきとちくへゆるも唐のゆうとくま  
あくむきのくがきのあくねばさればもくらどりもむくわら  
トとく

閑云やまやとみくわうとりかきりあくまう

やまきあやかくまえのゆくと戎集序よやまとみくわうひととき  
娘ちうきくとそくとそくと後抄序の戎抄序よやまとみくとのゆく、  
とあらかどやくとあらかくも和御言ふれとやくわらそりのゆく

又閑云爰治のやまくわうとりかきりあくまう

もくぬ名目と後拾遺集の序よとくとくとくとくとくとくと  
志紀志麻ハ和の枕詞をくわを身と人麻呂秋集うよ志貴島  
倭國とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと  
かくやむかくやむかくやむかくやむかくやむかくやむかく  
こそかくでくわんハ左年記よ天國押波流岐廣庭天皇坐師木鳴

後歎のちうよ  
すまくとく乃  
まくとく

大官治天下也。されば此の御事のゆゑに又欽明天皇紀より元年秋七月丙子朔己丑遷都倭國磯城郡磯城鳴仍號為磯城島金刺宮。とちくと地名を左手にせきの帝於の中には宮とあるへじ於のとあるがあるまやうやうて、古世をくは往々えてもかくを経て、あらわすがあるまやうやうて、古世をくは往々えてもかくを経て、歎の名あらむおづくらむの一名のゆゑやもあつてひあつてと又相傳するべくとづけてりやがてこそ是れの名は、一の名やもあつて津禹傳主とづけてりやがてこそ是れの名は、一の名やもあつてすハ夜麻登ハ一園の名あらが天ヤれ想在もあれと同ドをくこそ磯城島と申く大和の事にして、りすは九十九葉大伴永麻長。うふえられ焉がのすさバ之奇歌の入はりとあくひもひくまと

トある是と又とどくらえとく一の名とどうぞく歌のゆゑ小  
くもいつきに徳天皇紀皇后の御哥ニ阿袁述余志那良袁須  
疑袁陀豆夜麻夜麻登袁須疑云々と世に傳のゆゑとくとく  
時高市連黒人作歌やまくあらぬとくもむる歌のやくひび  
そらああらぬとくハ同ド大和のうちもとくもく歌のうとく  
ゆきとく磯城鳴といふ事和の相向とあるとくとく別名也名ともに  
てく坐たまひくらうどものあくられバ和也とくのゆづけく磯城  
島之和歌とくとく 同云或經よ崇神天皇紀より三年秋九月遷都  
於磯城是謂瑞籬宮とあると欽明天皇の磯城鳴宮と二代とある

王葉集雜五  
伊勢大脯あさに  
まのむらもとえぬ  
まきりかとりひ  
つりてけんれ  
赤深山八重様  
くまぬらをみ  
えーとかれぬ  
入ハ猪もゆる

いつへいひ 美云御子びじちとをもみりとおへそをあ  
はのまきこはへ欽明天皇の御みよしむよじあくへくるすとあれ  
第一の事とと思ひあつせくつゞきよあづびゆあめの磯城島  
宮きうゆきうまきう紫神天皇のふへ磯城ともとあもあくとく  
つもぐ又をくわくわくもでよつとくわくばもくたほの欽明天皇のま  
るまとまくわくじくにあくぞまくわくやまを二つあくく滑むじや  
まくばーつとむじぬまをわきわく 又國云歎たとめあら乃くと  
くハツよ 美云それ又おのれうれうれトくづくほのまくと  
鴻へ和紙をつづけくわうの精洞のまくすゆやねばやが  
てあれとどうて安濟のとへつあまざへりくわ磯城島之和

まほひごーもとちよむきやくはまくらひとがひとが方家  
第よふをそくやゆきとすうあうへあう地トモトモアリテモト  
鴻のたとひすのよへなの矢同あ里、ゆびの鴻トモアシ  
移やまとさうのたとひとせもつまく植の里と左今某の伴  
みごのまかうての事あま里とまくえもくまくまの種同  
かと一いじ鴻トモく風とひまかのてくと又鴻トモく飛と  
月かくと月のかまき桂の木よとアキセキとスカヒアリビー天の  
中あま桂とひま桂があまわとあまアキセキのうとアキセキ  
あま桂とひま桂とアキセキよアキセキよ和うの花視とまく  
て鴻トモアシ 園あまくみのやまひづとざわ

まもじゆりやくみすのが法なりあれど後せん行年も  
きくかえ字のすばらうにあそとそとよとりく言の義をもあ  
ちうがよほうとめぞほくされば一ときくのをく、後はよま  
きくじくばちくせきをわやくは傳すよがくいもくか  
本の字をもともの改めく傳すよもわやく又やまのをも  
あきこもとあきくもむかづくもとく又あきく又やまのをも  
やくは紀よ磯城<sup>イシノシタ</sup>島とされましのまくとくあく  
ひのほとちがくは傳<sup>ヒテ</sup>じ例<sup>ヨリ</sup>事<sup>ト</sup>城<sup>シタ</sup>を死<sup>スル</sup>といはを傳<sup>ヒテ</sup>て磯乃  
城<sup>シタ</sup>といふとよあづけする地名と呼<sup>ハシメ</sup>とればるをも傳<sup>ヒテ</sup>と象く  
と、近代のことをあくとおもへどよなあくとよな

カク やよひをありまきばれぞ やすあまづき今神 あざく 爰為  
とのとがくももより 僧字あも角 よ万葉集あどもえもば  
せよ、つきびせもとうもあやもお字よそろあも手とを  
べくば 用云磯城也とりつわきづくぞ 用云おも引く  
欽明天皇紀は倭國磯城郡とももを 神武天皇紀は倭國磯城  
邑云又弟磯城名黒速為磯城縣主崇神天皇紀は遷都於磯城  
云ふとある是も即用和也く 邪名の邑名すりゆく也  
トに分もとあるとあきの下とす 皇極天皇紀は志紀工部又え  
ナリとあるは物語歌文の本とぐくてすよ室あられよ 磯字  
を有もと城と傳下とひやけたそれとも移むくのまこと之岐乃加  
シヤ、カ

美之岐乃之毛と云和名抄よりもえり今もあづまびいたゞひ移事  
葛之葛不やどを用ひ半とさと磯城あは三輪より源連ゆく  
うよ今も村の名を以てすもあらじごとくはたまのたわやび  
以てはまう城よ新あきあき 又問ふうのをとへてようゆ  
そとう 美知まづ美知とくふ言のをと解くせぐ一美知ハ御路  
あく知とゆが本語ニ今も山陰中陰山陰をひ跡をどハ知とのを  
ぞきてあきぐ一そきよ美をきく美知とひりそ古事記よ味御  
路日本紀よ可怜御路とある是神代のをとそとば知とゆも美  
知とりや回ド事あく昔よ通蹟のとみあそそかのをハよとを  
きにありそれがよかまう文字波モハ道ハ山陰のを

かく道徳道義天道人道心道道理をどもあるべの事と  
わらう文字かくせじああく美知とりづきよ則るよりてば字と  
ぐづきのまよやくあれともまか美知と列ゆ多よゆあらむのづき  
美知の言とも道の字も義ともづきあら則りことあらむと  
ての言よびくづひ多くともバ道字やもあらの義ともづひれど美知  
の言ハがハたれぬのからまか一物を好世の事もらのつまくまく  
しまくを極めどの道字の義をこそ美知の言ひ義とりづきだよ  
幸強附會のまよくのそれが一物のかもとよくもまくやくづき  
祐乃へ君御のたぬあれどもさもととてづきとて代わる  
ありこそ文字とくとくのたまとの身ひやうとよかしげてゆ

さてハ天照大御神ミテ天日嗣也トヒテ天皇の  
高御產ノ御業モも御歴々御づけられテはシテハ  
準テく、御事モ也トテアリテ御づけられ  
ヨサモ也の内を以テモチトシヒ難事ニモタクシテ  
アレニモトガラスモ未だニモ御内トシヒキヤニ  
モトヅテ續日ナ紀卷十九ニ新道トモウの事ト  
集ニテ序モ斯道トモ若道モアリモ一假字序アリモ  
ジテモトモ内トハアレガラスモ内ニモアリヌ  
キヤモトハアレガラスモ内ニモアリヌ  
又同ノく詩とチ多ヒ

彦麻呂云日本書紀  
神道又古道天道  
をどりくわれど  
漢文書きする音讀  
万葉集ニ世間  
之遊道が冷若云  
とあゝ遊樂もる  
より遊の道とよ

あともちく徳ひやまわされ、うよゆのまのかへりあらう  
周の代せやうあきへつる年月よきこのもあらゆをきぬ  
とべらむまく作づる程よ人情のあはきあらもじひをそひと  
りまうもぐくへきくあらむことのまきばれんせのゆゑ乃  
世のとくじまにまくじまに用ドやあへあへばをと待せ  
まのけぢあハ洞のとくとあをとと今もいきまかアビとよ  
人もあれどやあぬまくまく洞とまかうアヤマチモセチ  
うくまよあくびとまく代のとくとくこまく、ううアヤマキビシ  
まのくわく人のまなまうよさへおまくすくやほざくに  
やくびきりあとば今の世をどうぞううめのめづく

まんまとかくゆのまにさうじめたらせぢやにまじらせる  
わもうあくあくにあつたときのまくとひまく  
とりかくともとまく相のひまくとひまく今よりとりを  
きつまくのひまくは時代も今もあまにまくとひまく  
ほのまくとひまくとひまくとひまくとひまく  
ほの性情とひまく温氣敦厚とひまくとひまく  
せうとひまく經厚あらひゆよもくとひまくとひまく  
るうとひまくとひまくとひまくとひまくとひまく  
せくとひまくとひまくとひまくとひまくとひまく  
よのとひまくとひまくとひまくとひまくとひまく

やくもあまくさむ風景のやうにひきよしめがれ  
詩人の心をもて優はあらずあまくさむとぞ又ひきよしめのうす  
ゆきがき、内難ととせよもゆづくふのあくよよむつまく  
さうげよとくのとせよもくわくへうじよまわく わ乃あ  
とくあるもぢとつじよかねとくめもとをもあら 同云  
波をハむくへくあまくさむりそれわふく男のあくよよ  
ひまねばざくもあまくさく、却くまくはわふくわふくあくよよ  
たゞかあまくのひとあましやくあくよよあくよよ  
えまくさくや 美みよまくさくまくさく、あまくどまくとくまく

禮記經解卷之三

やうよもづくへりあくまわよあいだれのゆき  
るよあもかゆよもかざらはのせめやうにさげあひゆ  
えびとあくらけのゆきをさげたま  
らをととくつきぐへりぬかふみーとせぎどとのゆき  
のゆきあ時の義やもあびひるのらゆももじくすみねがね  
人の性情とゆゆももせばあきのちゆきかくらへの言  
ゆくあき孔子家語よ詩之失愚とりて言あくももくを  
まくべし處のあくまくのくもかく  
りつりぬるのまくもとひづき、こもつとドきわすてれす

六経の一つをくほへば、とぞもとほのせせは、ものかのまを、  
まもれもとくもとがとうづよがじくへか、こゝもとのももとを、  
うとうまきは、情を、こゝへひきわても、  
くわゆあき、さまと人の情の、まみやいあら、  
げの情を、さとすやど、ううや、  
さくうもとよとああと、 因云々、  
うつゆうう、のまことの、情と、吟咏、ハ、れ  
らぐわらぐ、うごくね、りに、 義云々、  
きのめと、うごく、が、まよまよまか、が、ま  
わ、うあくや、と、おもと、の、回、うやまを



事ハされかの不可ニ近婦人トソツアサクヅヨウムキハアレル  
ミテモリトソドケル也トモ人情アリマサアシアリビアラト  
カレハアリタアリミタマニテアレトアリムタマヤアリスハ不  
可ニシテ近婦人トモアリニ言痛<sup>ヲ</sup>ヒテヒテおのアビ  
ミリカナハ奈ズモシテアリニアリカナハセシモシテアリ  
シテアリハアリカナハ四アリシテアリモシテアリ  
サハ固ドモアリカナムニシテ人情アリバナヨモシテアリ  
レジモセトガソシテアリシテアリカナシテアリモシテアリ  
アリアリハアリモセタヘ人情アリバナヨモシテアリ  
ヤモシテアリヒタテアリシテアリカナシテアリモシテアリ  
父ノ役ノシテニ思ひアリテアリカナシテアリモシテアリ

彦麻呂云古事記  
いさあとの余比々代  
させ給ひ一段又乃  
御蓄御枕方御蓄  
御足而哭云

あづまを傳よきとまじひくとあきらむとひつひつとけくわきまみ  
もとと思ふがれちゆきうきは女しごのあまぎあらびや 美云  
まままざうへ足のまんざまゆめ思ひあらわみ、げよ被にしく  
つまどときまくわくあられとそばくをつゝせよもづくやあよ、うねき  
情とゆきくわあがちよきそつけつこうひきうごくこ又母のんあす  
ゆもうぞむきあくまくこぐまくまくハまくまくまくやくへまくハみ  
やれど見も、うごくまの情かくふるまくあれ、まくまく堪えふとも  
のがあくぬとのうごくのけぢかくと、ハあとひりぬくと又も母をねりと  
のほきぬさううくもわくね、またとおひづととつうせ  
せうととおまじづくまあるゆ中やうが娘とつあは思ひも

万のまよそくへまうげよもやもよめじの人のそれといふと  
りよ思ひもあてハつともすくもひかづきよのむぢう  
ゆそやくほどよかうのゑれうはひよかそハつひよ方のゆゑ  
唐國のやくよあむなまくらまされどさうのえどそまわる方のゆゑに  
あづひてきむ言ひ老臣のゆづれ神代のりまくのまくやくはま  
うそひつあむたど考むよ、みよくふのゆゑにさくいがちうくさ  
まハゆよほしが竹うりえれ、バ人多かされよとくとくせとくと、  
うまだときバ古今集のまく序は自大津皇子之初作詩賦詞人  
才子摹風継塵移彼漢家之字化我日域之俗民業一改和歌漸衰  
とりうびゆのよし和歌漸衰といまぐせの風儀の變ゆきゆき

きをほの世よつてとくよくあまよりまわすとゆれどぞ  
きのま今ハの時代ハのまよゆきのねづぎのまくの御ハくやをうつむ  
ゑのゆきとまくらぬ、ひづげくやハくもせんハかくもせんハ見むが  
とかとびよ彼ハゑのちくわくハくげきくらむハとよそハ仰  
つうへくびつち多く耳ハよみちくハあゆくハまれくハ文字ハのまひ  
あゆまハくくまよあゆハくゆくハゆくハそれもくもく  
うくゑ室ハの角ハくもびやくハくもくハめあくハくくハこれと  
そくばぐとよ鹿ハとけまハよ侵スグとくとのくは六種ハ木のせハと  
うくえくまハバげたハとくハ老御園ハたてとくハめのまやまも  
半あすじまたとよたてとづひハ神ハえりとせとのまもどき

玉葉集雜五

前參議為相  
その人のほ  
うつてくと水  
代とくへき  
波のた

唐うまなまめひてひぐくへくすかまく程をりとるぬは法云  
てゆゑ傳々ようぬあよ説かくゆるとき大作のまとけ  
うーあられよかほくみゆびやうかう神の御内をとくはうせてもやう  
かうききよかあうびやうとけうのたのと神せのいと夫の娘  
あうびてねわまうらうもあも 因云ふやも人のませぬのふ  
ちくとうへくらむもじくうきくよ白居易がなやどハ若よ  
うくううとつぞうの意せきとバ癡ぞうみまくはうを  
意云まー偏よらかにれもあかくのまとおどくはみとハア  
うへまくたまのせんくまくはうみくはうみくは  
あきばかきくうこかくは因ドクカキムセうへくよふく

待ハシヒ因ドクカキムセうへくおれバシヒカヘリミハラテ  
あれ共はくややかくそくは因ドクカキムセうへく  
ほのせたゆおげくもくもくのうようくぬもあくまうかとバシヒ  
取用むハ只はうのうとおうとおうとおうとおうとおうと  
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
自がようのうめううとバ多むとよみうとよみうとよみう  
のうとよみうとよみうとよみうとよみうとよみうとよみう  
世くよまくよまくよまくよまくよまくよまくよまくよまく

彦麻呂云定家卿  
詠詩大概十難非  
和寄之光達時節  
之景氣世間之盛  
衰為知物白氏  
文集常可握翫  
深通和寄之音

聖くのうの歌とハ神代より今も傳へてゐる事と  
うるぬれわまきとまきとあがめのうや本ゆうと  
歌ようりりぞー今もつうぬ伝はつにとかばまひぐむと  
ごくとがむハサキスヤシビトヘムカモクシジトウモ教  
ゑ立のねうおけたまきのをよあがひ事をもんにれ  
かぬきまへあとのまもうほひあきのゆにかざすよりくと  
きかれてうづよさうとせむかくども人々へ傳へてあるび  
又もろとももくも人のをれあつてやうよもくけ  
とばせうづもうへ歌のをうとうとせのせやのはつじゆ

さてうねよ室へてうきゆめとて御歌人ゆふみれどうひ歌を  
きぢこよみれまぬがおはゆよおげらきくのうみすに  
又世の風歌よせれく書るゆもあうきと  
世よみきつに 美みまづな年紀日本紀よもくとつ代の  
うきとくあくせきの集どかかとおの歌をことよまくや  
万葉集や相聞とあがめくもみの歌と雅歌相聞挽奇  
とつよ分ち八の巻十の巻あと四季雅歌四季相聞とこうく  
やうよせとがまく雅とりくまくうへきとしゆとまくとまく  
詩経やもじの約多一ともいわればかくあるをりよゑハ万乃あ  
りよもぐれてほく人のよもそひとく場とよきとよきあらが

拾玉集七意  
うひとくの人は  
あらせあらうひ  
もありしきのたれ  
壬二集上忍意  
うひとくをあひ  
あれうひとく  
かはまつてぬき  
か

さうばもれてあつとあらまぢへひよきのうよせはうるるゝ  
問云  
昔々の世のじよよふく祭ひあがのへきとゆかうめの祭  
を祭ひ神室をむらかどらむかあがちようかくみやうに  
かどらるるのうのうはうよつまゐど  
まほまと祭のまきまき  
若き人のよゑく學すやひはま情とお思ひの中身ととあくま  
ほくわまほくわくじりうどひは祭とくあくま  
まれぬあくびで祭も情のやせ一きくあくばとくうして  
人とあれとやむうと思ひあくまうとてアレを思ふやうのう  
ひとよし情とひきまきま情うとく祭をきく又祭うきて  
情すらまく一やうあくびとうがうりあむわきうハ情のまう

おまうねえれ情の方め思ひ、わかと感じやくありれあま  
こまうねえれを祭の方め思ひ、一まくば祭ひとまくまを  
あこ見よもむだうるまくやうやうひ、やううきえきのう  
まくと後のうがまう、やううだ、それ神室をむくわくうのう  
祭とくあくびのあいをあくまくはうとまくやううひで、みか  
べうとまくはうのうがまう、やううだ、それ神室をむくわくうのう  
あくわく、あく、ばはくはくよまく、あくまくはくはく  
もとまうよつけ、わのわをあくわく、うはモくとわのあつと  
さへあまう情のう、あよつまくよくまくともぐはのせ

あくよつとあがむやうにかくはうおもてあらわす  
されどひきのまことつばのいぢりをうへてあまことああと  
そのもよゆかへりてうきよとめぐすあればまの  
せよひくとほよあまかうへくうまどとまくかくづくわのあれゑ  
こゝろもむくと、これ彼のもじハシメテにうとくとくまくも  
わまく思ひくとまわくやむかの方々々々のこころよ酒と煙ふら  
のあじひよ縛あひたのるやくうじびのとねやつせじふうやくいと  
をうきよふくと思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて  
がうれしよふくと思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて  
事あるあるとあらわすがうれしよふくと思ひて思ひて思ひて

主婦の情を深くするよもやまとさうとせんじ  
支を思ふよかとばあさんへおまきの心はまつとも  
お歸のあひひのまかわすれあまゆきまつらようづくと  
解ゆやまぬ女とけいわまきあくまくの國の風よ豊く人の、  
うきよてけひとまくまくの國の風よ  
あれどもひよめくよつひよめくよ  
まよめくよめくよつひよめくよ  
びよめくよめくよつひよめくよ  
てつひよめくよめくよつひよめくよ  
えひよめくよめくよつひよめくよ  
くひよめくよめくよつひよめくよ



後よりとくとくも人へ傳へたゞで、つむはる文のよきと良の精  
慧といひたつの事せんとあよまきよきをもひそへすとあよばせり  
えきて若くまへまづやまとさくらうじぬやまよひのく  
わとまづりへつるまきわかくさだまへまよひのく  
あつれまゆやまめめにほんことよわのあれあちあすむ  
とせまゆりあまがまごめんとまくらへまよひのく  
うよかのせまゆりへ又同ドヒのまくらの唐書とまわびて、うけ  
せの國史をどもとまくらのまくらと、うけびらひとまくら  
まくらへまくらのまくらとまくらとまくらとまくらとまくら

尼をもづくようやか法のまごとのところ人のむらうを信ひ  
うやうあらねど魏志といふうがくはじめのと其風俗不遙と  
えりゆゑもとをもとをもあべのまに唐からぬ人を  
すまへさうりやしきくまうてどよかな多きハモモトヨリ  
國のまきゆゑを代ゆるハモレう人のまちひとじくほ  
そくまもせんぞをくわにせほとうあれをあき人のとふ

多くおまえぬハ神の御事の板

同云法師の意

すハヤとあらまきよきとあらとうのたやうとがんでしてせく乃  
集かとまのまうを多くともうももうでよむはつよ

美也

まきゆくひくまくまく今もねこのまくよまくとばよに  
あさまきまくあるむももももうハあもどくもくもくあ  
きくもくもくもくハまくまくとまくとまくかくもくひあくよ  
みくもくふうへもくもくあるゆく必信佛の教よもじりともも  
ヨシダヤとあらねばそのまくまくまくまく必信佛の教よもじりともも  
あくべくおのあれとむのまくまくまくまくまくまくまくま  
もくまくまくまく法師をせとのまくまくまくまくまくまくま  
教をゆくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくま  
トもくもくあれをまくハ松あひてまびつてじうハのあれゆ  
あひこをさむあら法師あむくに像は信と人情のうる

まゆあべみか佛善産のなんじやわまきだればりま  
さとうとえざむわどさんのかしまでひめんへまくもす  
えーもあまじくねせの渴めのうぬびにまごあくび  
をもぐたなじこれわざまくまくとまうあればくよせ  
いもくはねくもあくべとくもくとあくべとくもく  
しもくあまき、あやまちとあくべと傍とくもく  
やくせむこねーまくバ佛のゆきあのかくすへごとくもく  
ぐくまくひやまきねーあくと傍とくもく  
苦佛のやくあくべとくもくとあくと傍とくもく  
そハヤく危やくまくまくあく今まくもくとまくもく  
いもく

あかときひじきのあくむよひくまある花紅葉の半おはまぢ  
さくとあからでくといひ四ひ又々ひかく地一きかよけあひ  
ち、同かくゆくゆくと花紅葉の二つとくと花紅葉のゆ  
トこのゆくと花紅葉のゆくと花紅葉のゆくとがゆ  
をつハあまき、法師むせきむせきむせきとがゆ  
あぐく女のきハことの人のひととく必のち乃よとくとがゆ  
ゆくわゆく世を人ハまに因ゆく觸キキキキやーあきぞ  
こきのあまきハひととくとくのとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

もしもかくあかくらよそひりよあくゆーとーうぎるわる花れ  
をとくわづみようがくあきせのまどばつとうめでーと  
せはざくきこはーとバ面のこぐひハ骨まやーもあの金ハ得  
まくーとどもむかくかくことうあぐくわーと紀  
女とくくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
鳥虫やせうてむげよ精うきあれごびとやいとまー人とあ  
中やも群よ法師ハ妻ともわくべこの欲をたよつてもあそ  
ひよくすき思ひのものをがくづくみうきバ憎うもまくわくみ  
意のうハ多くわくよのぞくづくみうかのちがうのうへ乃の  
づく御鳥所の声よとほりてむだきのうとうち徳ーと

とうよおどと法師とぞくよつあひてわんとあうどく  
まくよのうちよ深くつゆきの身をもこのうにうとつぞ  
つぞと思ひもくうもハ発露懲悔のうとつあひぬーくや  
うーかづもうハ恐れがとめざめがとめざめよあむ

附錄

古事記日本書紀萬葉集乃あるき歌どもとおのづ物  
として心のまゝりよみ出せば人ふらうすむことわ  
たりと思ふれど狂歌とひきかえゆもとつことわき  
とを難へきぬぞねほくもをはきをつりへあうの歌、  
さうありよみゆき物後の世がわら狂きあくそつく  
くる物ぞとのまゝくわふ小風ひきるよほ乃世すれ  
歌をよもよき物の風ひたゞがいとがまくの歌へ  
ありとのまゝく人の耳まき言ふどあなごうや  
まゝく出へく狂歌よに言ふもハラキリの心と

せきをもつてうらうのあひよあむいふへる  
あつてもうとせきと今世の人ぞつやへがりの事あるは  
きてほんねる物をや中々に後のせがくらうよこそをま  
つよりよせきとあきそひすと今ども時世も人を  
あづむたそくさゆをひくへがりの事あるとそく  
しといふやあびらなうらよ矣あるなる詞をえり  
ゆく跡にはまつちハ言よよりれとそくへ  
やもすと渴せして母のづくこそ四言六字八音あもあ  
ゆくとよじとよハソウの歌を謡ひ一物あれば武を  
争と長く争き或ハ争を短くちくく五言七字れや

かよとのへ謡ひ一事歌よ所のひもきつるがめくこの  
世ふくまくるりわなく人よつてとひきをえき少しとも  
しききみすりあきそばにまつちハ言あきそ口調もあーくや  
ぐすきみのとがやかとやむすとえびへ母のづく  
にまつちハ言あきそくとのひて口調あくぬ物  
それもくぬそうむさきわとあぬをとハ年ざろりよ  
くをがれあまくわかれ人のよあるともくらうや  
あづらひまうへやくちよくあくと古事記日本書紀  
万葉集の歌の常よとあきそく歌物とくまん人を  
えづくあきそくよまび人のすとくらむわげ

つらひぬ人をこのまゝじきあられぬ物よあしむ  
そぞぞ

文化十三年七月

藤原彦麻呂



文化十三年歲次丙子初秋湧原屋茂兵衛藏板

